

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名	小川法道
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 1 1 2 号
学位授与の日付	2021(令和3年)年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条
学 位 論 文 題 目	中国浄土教における業の問題 — 善導の滅罪と往生を中心として —
論 文 審 査 委 員	主査 本庄 良文（佛教大学教授） 副査 曾和 義宏（佛教大学教授） 副査 柴田 泰山（大正大学元特任准教授）

〔 1 〕 論文の概要

本研究は、中国浄土教における業思想の様態を、曇鸞(476-542)・道綽(562-645)・善導(613-681)らの中国浄土教家、特に善導における滅罪と往生に焦点を当てながら明らかにすることを目的としている。併せて、ほぼ同時代人である浄影寺慧遠(523-592)・天台智顗(538-597)・三論宗吉蔵(549-623)の教義との対比を適宜行っている。また、可能な限り広く浄土教を見通す意味において我が国の浄土教家の解釈を辿っている。

序論 研究の目的及びその方法

仏教における業思想の流れを摘記し、先行研究の整理と問題の所在、研究方法を明らかにしている。

まず初期仏教、部派仏教における「自業自得」「善因楽果・悪因苦果」等の、ブッダによってさえ動かし得ないとされる業の大原則が、大乘仏教において、懺悔・随喜（他者の善悪業を喜び、他者と同じ善悪業を得ること）・廻向（善業を他者に回し向けたり、目的を転換したりすること）などの理論によって「緩和」されたことを述べ、浄土教がそれらを受け継いでいることを確認する。次いで中国、日本においてそれらの理論が受容され、それぞれ固有の思想との融合や変容が起きたことを概観する。次いで浄土教研究においては、若干の例外を除き、業の問題が体系的に分析されたことがないと指摘し、本研究の意義を強調している。

第一部 大乘仏教における業思想—特に浄土教を中心として—

インド、中国、日本における「転重軽受（重く受けるはずの悪業の報いを軽く受けること）および「延年転寿（寿命を延ばすこと）」の教義を取りあげている。

第一章 転重軽受の思想史—特に浄土教をめぐって—

「転重軽受」を般若經典類（經典読誦や般若波羅蜜行による）、大乘『大般涅槃經』（智慧

力・善業・懺悔による）、龍樹『十住毘婆沙論』（懺悔による）の分析を通じて、大乘経論においては全体として懺悔が強調される傾向にあると結論づけている。また「転重軽受」が可能となる理論的背景として、部派仏教における定業（必ず報いを受ける業）が、大乘仏教では「不定業（報いを受けるとは限らない業）」と解釈し直されることを指摘している。

また「転重軽受」の使用例は、唐代の法蔵(643-712)に始まり、日本の源信(942-1017)・珍海(1091-1165)・法然(1133-1212)等に継承されるが、我が国では各々独自の解釈が展開したとしている。

第二章 延年転寿の思想史一特に浄土教をめぐって一

「延年転寿」を扱う。まずインドの部派仏教の中で、覚りを開いた阿羅漢が寿命を自由に操ることができるという教義にその源流を見る。不老長寿を貴ぶ中国の典型的な例としては『抱朴子』(317 成立)を取上げ、「増寿益算」「延年益寿」の用語に注目している。またこれらの用語が、大乘『大般涅槃経』(416-423 訳出)や『大方等大集経』(414-426 訳出)などの訳出の折に受け継がれていることを示した。

次いで、道綽が『安楽集』で、念仏三昧や持戒によって「延年益寿」の利益を得ると解釈している点については、『華嚴経』からの影響が認められることを論証した。さらに弟子の善導が、『観念法門』において「延年益寿」の表現を「延年転寿」に変えていることについて、「延年」の根拠を阿弥陀仏の護念力に集約することにあると論じている。また日本の珍海・法然における用例では、「延年転寿」の思想は阿弥陀仏の「護念」の概念の中に吸収されるようになったとしている。

第二部 中国浄土教における滅罪とその過程

曇鸞・道綽・浄影寺慧遠・智顗・吉蔵・善導における滅罪を、特に善導に焦点を当てて考察している。

第一章 曇鸞における滅罪とその過程

曇鸞の『往生論註』における滅罪の過程を論じた。曇鸞は衆生が阿弥陀仏の名号（「南無阿弥陀仏」）を称えることによる滅罪⇒心の浄化⇒極楽往生を説くとしている。特に、『観無量寿経』下品下生の、五逆罪を犯した者が、臨終に念仏して極楽に往生しても、長期にわたって蓮華に閉じ込められるという点について、「まさにこれをもって五逆罪を償ふべし」と述べていることに注目し、曇鸞が、(1)往生以前、(2)往生以後蓮華が開くまで、(3)開いた後という三段をもって往生人が罪を滅していくと考えていた様態を明示した。

第二章 『安楽集』における懺悔をめぐって

一浄影寺慧遠・智顗・吉蔵と滅罪との観点から一

道綽『安楽集』における懺悔による滅罪について、同時代の浄影寺慧遠・智顗・吉蔵の懺悔滅罪観との比較を通して考察を加えている。浄影寺慧遠は菩提心（覚りを求める心）を発した上で懺悔した場合と観仏三昧を修めた場合との二種によって、五逆罪（仏教における最も重い罪）をも消滅させることができると解釈することを確認した。吉蔵の検討を通しては、吉蔵の時代には、滅罪の方法として、懺悔することが当然と考えられるようになっていたと論じた。智顗については、「懺悔のために十種の心を起すべし」とすることから、「十種の心」をめぐって『小止観』・『摩訶止観』等を検討した。特に『小止観』の中で「滅罪方法を求めよ」と説いていることに関して、道綽がその説を踏襲していたならば、『安楽集』の中で念仏と懺悔

は同じ行であるとする事ができたのではないかと推測した。

また『安樂集』において、「『大集經』に云く」と述べながら、道綽が經の原文にない「修福懺悔」を付加した意図については、凡夫の臨終時の態度を重視していたことに求める新説を打ち出している。また道綽が、「臨終に心が平静であるためには、平生に精進しなければならない」としていた背景には道綽における業思想（特に無表業）の理解が考えられるとした。

第三章 善導における滅罪とその過程

善導における滅罪とその過程を分析している。善導は現世において滅しなければならない罪を往生の障りと見ている。それを阿弥陀仏の本願力によって除いたならば、「身器清浄」となり往生できる器となると考えている。また極楽往生した後も微細な過去の業を滅する必要があると考えている、としている。

次いで、曇鸞と同じく、(1)往生以前、(2)往生以後の蓮華が開くまで、(3)開いた後という三つの段階での滅罪を考えていることを明示している。

さらに、現世での滅罪の範囲の問題について、五逆の罪人や大乘經典を「仏説にあらず」と誹謗する人（誹謗正法）が阿弥陀仏に救済されるか否か（逆謗除取）に焦点を当て、善導の解釈の背景を論じている。従来の説では、善導が誹謗正法の者でも救済されるとする根拠を、『無量寿經』の辺地往生の教説に求めるが、その解釈では仏智への疑惑と誹謗正法を同一視する難点があると指摘し、闡提（善根を断ち切った者）の場合と併せて、念仏による滅罪にその根拠を求めるべきであるとの新説を提起している。

第四章 善導における本願力

善導が阿弥陀仏の本願力に滅罪の効力を認めていると考えられることから、曇鸞・道綽・善導の三者に共通する、阿弥陀仏の「大願業力」の重要語に考察を加えている。

まず曇鸞について、先行研究では、三者共通の語であることを理由に、第十八願の救済力と考えられてきたが、四十八願成就を強調する語として創出されたとの新説を打ち出している。次に道綽については、往生成就を他力によるものとし、その他力を「大願業力」としていることや、往生できないならば「四十八願、便ち是れ徒らに設くるならん」と説いていること等の理由から、阿弥陀仏の他力を強調する表現として「大願業力」の語を用いたのであろうと推測している。最後に善導については、最初期の著作『観念法門』における「大願等業力」という表現については、四十八願の意味で使われていると考えられるが、『観經疏』玄義分では、「大願業力」となっていること、同じ『観經疏』玄義分で、善導が四十八願の一々の願意を、第十八願（後に法然によって最も重視される）の救済力に求めていることから、第十八願の持つ救済力に限定したと結論づけた。

最後に善導の「本願力」の用法に焦点を当てている。『観念法門』では『般舟三昧經』に説かれる「三念願力」（詳細割愛）によって見仏することが可能であると考えられているが、『般舟讚』等では、来迎・遇善知識・見仏の意味が付与されている。このことから善導が『般舟三昧經』に説かれる「三念願力」を、『観經』の説によって拡大解釈した「本願力」へと深化させていったと指摘した。

総結

以上の諸章において得られた結論を総括している（詳細割愛）。その最後に、中国浄土教における善導の業思想の位置づけとして、「自己の業に埋没してしまう衆生に、称名による滅罪という転換方法を与えて、その行を精進すれば、仏力の加念を蒙ることができ、それによって

衆生に転換救済の道があることを示そうとしたところにあるといえる」としている。

〔2〕 審査結果の要旨

従来の中国浄土教研究において実践論に関する議論は多いが、「業」論を積極的に取り上げた論文はわずかである。このような研究状況のもと、本論文は中国浄土教を中心とする「業」論研究に取り組み、特に善導教学における懺悔および滅罪の構造について分析を試み、今後の中国浄土教研究における新たな可能性を開く内容となっている。この点は高く評価すべきである。

また、一次資料については必ず逐語的な現代語訳を与えて筆者の理解を明瞭にする姿勢を崩さない点は、時代の趨勢に沿ったものとは言え、高い評価に値する。

第一部「大乘仏教における業思想—特に浄土教を中心として—」

第一章「転重軽受の思想史—特に浄土教をめぐって—」

本章は大乘の業思想の特徴的理論としての「転重軽受」説を、初めて網羅的に研究したものである。源信・珍海・法然を取り上げる点については、一見、法然浄土教的視座を前提とした日本浄土教に関する議論にも見えるが、筆者は伝統的な浄土宗学の研究手法と最新の中国仏教研究の方法論との両者を組み合わせ、術語の使用過程を通じて語義の変遷を追求し、そのなかに思想的展開を見出そうとする研究方法の具体例を提示している。この方法は思想的解明において極めて有益である。「おわりに」では懺悔と滅罪の構造を業論という範疇で論及し、大乘における業論の特異性を浮かび上がらせることに成功している。

第二章「延年転寿の思想史—特に浄土教をめぐって—」

浄土教思想における「延年転寿」説は、現世のみならず、来世におけるそれをも視野に入れた内容となっている。筆者はこの現当二世にわたる当該理論の思想的展開を丹念に辿ることで、浄土教思想の顕著な特質を明らかにしている。

第二部 中国浄土教における滅罪とその過程

第一章 曇鸞における滅罪とその過程

曇鸞の懺悔と滅罪に関しては、筆者は曇鸞の所説を丁寧に読み込んだ上でその内容を分析するとともに、良忠(1199-1287)の見解も援用しつつ、曇鸞所説の懺悔と滅罪が往生以前と往生以後の二世にわたる可能性があることを示唆している。この指摘は曇鸞が四十八願の第十一願・第十八願・第二十二願を提示することで、大乘菩薩道が阿弥陀仏の本願上において展開していくことと軌を一にするものであり、曇鸞が修行の進展のなかで滅罪が深化していくことを考えていた可能性を意図しているものと読み取れる。

第二章 『安楽集』における懺悔をめぐって

—浄影寺慧遠・智顗・吉蔵と滅罪との観点から—

慧遠・智顗・吉蔵を取り上げ、「道綽は懺悔行をより簡単に念仏を称えるだけにし、かつ常時に懺悔を修すことができるようにした」と指摘している。この箇所では特に、訓読さえも公表されることの稀な関係資料について現代語訳を提示した点は高く評価されるべきである。

第四節「道綽における「修福懺悔」の付加の意図」では、道綽が「臨終時の念仏実践」を

修福と考え、この「臨終時の念仏実践」のために平生の実践行の精進を勧めたと指摘している。

第三章 善導における滅罪とその過程

特に「善導における誹謗正法摂取の問題」では、従来の研究において「善導は疑惑往生と謗法往生を同一視している」と論じていることに対して疑義を提示し、疑惑往生と謗法往生は別個の問題であるとの有力な新説を提示している。

第四章 善導における本願力

業論上における本章の存在は実に意義深い。本論文が凡夫における業とその滅罪の解明を意図したものであるからこそ、阿弥陀仏の救済力を対比的に明示することで、いわば凡夫の「無明的業」の救済は、阿弥陀仏の「明的業」によってのみ行い得るという救済論の構造を明示することに成功している。

総結

善導が提示する本願力に依拠した往生論の意義について指摘し、さらに中国浄土教における業思想の位置づけについて触れ、滅罪を通じた救済の道の提示が善導教学の主旨であると結論付けている。その上で筆者は業論的視座を通じて、滅罪と往生の過程のなかに業因果の直接的因果関係の変容（いわゆる「緩和」）を見出している。このように滅罪論を基軸とした中国浄土教の思想史的展開の解明には前例がなく筆者独自のものであり、また現当二世にわたる往生の過程と構造の解明も極めて重要な指摘である。

【本論文の課題と最終的評価】

上記のように中国浄土教における業論の解明という点で、今後の中国浄土教研究に新たな一指針を開示したことが高く評価される本論文であるが、また同時に課題も残している。

(1)「序論」等においては、専門外であることからやむを得まいが、先行研究への依拠が目立ち、筆者独自の所見に乏しい面が見られる。また阿含經典との関連を指摘できるとより広い視野で論じることができたであろう。

(2)「日本浄土教に見える転重軽受の思想」で往生以後の滅罪を五逆の滅罪と解釈しているようにも見受けられるが、ここは悪業の余薫の滅罪の可能性を考慮する必要がある。

(3)延年転寿説は中国仏教における業論の受容として解釈する側面を考慮する必要がある。

(4)第二部第一章「曇鸞における滅罪とその過程」・第一節「『観経』における滅罪」では、『観経』所説の滅罪に関する説を整理しているが、『観経』が何故に長短の滅罪期間を説くかという点については、『観仏三昧経』などとの比較から再検討すべきである。

(5)「おわりに」では割り注にみえる五逆の「償」説を提示しているが、この注が曇鸞本人のものか否かの問題、および「償」の語義そのものについても再検討を要すると考えられる。

(6)同じく「おわりに」では、道綽が智顗の所説を参照した可能性を示唆しているが、『安楽集』に天台智顗の著作の影響を見ることができると、慎重な検討を要する。

上記のように種々の教義的な課題を有する内容ではあるが、本論文は業思想と滅罪という一貫した視座のもとで善導教学を中心とする中国浄土教に対する体系的アプローチを試みている点で類例がなく、かつ多くの有力な新説を提示している。

よって、本論文は博士（仏教学）の学位を授与するに相応しいと判定する。